名古屋学院大学論集　人文・自然科学篇　第55巻　第2号　pp. 195–211

〔研究ノート〕

1884年初週祈祷会におけるF.C.クラインの説教

黒　柳　志　仁・髙　見　伊三男・増　田　喜　治

名古屋学院大学　国際文化学部/スポーツ健康学部/リハビリテーション学部

要　旨

鹿鳴館時代が始まった1883（明治16）年）初頭，横浜でリヴァイバル（信仰覚醒）が起こり，その後多くの日本人が洗礼を受けた。日本でキリスト教に注目が集まるなか，同年9月，メソジスト・プロテスタント教会の宣教師F.C.クライン（Klein, Frederick Charles. 1857–1926）とその妻メアリー（Klein, Mary Elizabeth. 1861–1958）は来日した。翌1884（明治17）年の初週祈祷会は，リヴァイバルの影響下で開催された。本稿では，同祈祷会で唯一内容が明らかとなっているF.C.クラインの説教を全訳し，本学の建学の精神「敬神愛人」を追求する。

キーワード：F.C.クライン（Klein, Frederick Charles），建学の精神　敬神愛人，メソジスト・プロテスタント教会，初週祈祷会，リヴァイバル

The Sermon by Rev. F.C.Klein for theWeek of Prayer in Yokohama, 1884

Yukihito KUROYANAGI, Isao TAKAMI, Yoshiharu MASUDA

Faculty of Intercultural Studies/Faculty of Health and Sports/Faculty of Rehabilitation Sciences
Nagoya Gakuin University

発行日　2019年1月31日

はじめに

1880年代，日本はヨーロッパに並ぶ文明国の一員に加わろうとしていた。1883（明治16）年に鹿鳴館時代が始まると，英語教育が盛んになり，人々は欧米の文化や風習を理解しようとした。当時の日本政府は，欧米との条約改正に備えて欧化主義政策をとり，近代国家として欧米諸国に匹敵する国造りに邁進していた。欧米化主義政策の担い手であった外務大臣の井上馨はキリスト教伝道の推進を図り，慶應義塾の福沢諭吉もまた反キリスト教主義からキリスト教を容認する時期もあった[1)]。これまでキリスト教との関わりが薄かった上流階級の人々が教会礼拝に加わり，師弟をミッションスクールに通わせたこともあった。

1883年初頭に始まった主にプロテスタント教派のリヴァイバルを追いかけるように，メソジスト・プロテスタント教会（米国美普教会）は，その年の8月に按手礼を受け，歴代最初の教職資格をもつ男性宣教師を日本に派遣した。彼の名はF.C.クライン。宣教師たちの伝道と教育活動が，文明開化に邁進する日本に受け入れられ，ミッションスクールの開設につながっていく時代背景のなか，1884年1月，宣教師F.C.クラインは横浜で開催された初週祈祷会で礼拝説教を行った。

1. 1883年リヴァイバルの意味

初週祈祷会とは，1846年にロンドンで開催された万国福音同盟会創立大会を契機に，年頭の1週間にキリスト教諸教派の人々が集い，祈りを共にする集会である。日本では幕末期に来日していた宣教師たちと共に，英語を話すキリスト教の教派を越えた人々がこの動きに同調し，1872年(明治5年)，横浜で始まった[2)]。

その11年後の1883（明治16）年は，日本のプロテスタント宣教において，急速な成長が始まった年として位置づけられている[3)]。発端は，その年の1月，横浜海岸教会で行われた初週祈祷会でのJ.H.バラ(Ballagh, James Hamilton. 1832–1920)の告白であった[4)]。そこに集まった数人の船員たちは，J.H.バラによって信仰に導き入れられ，回心の経験を与えられ，また信仰から離れていた者も再び立ち帰らされるような特別な恵みを経験し，信仰の覚醒を与えられた[5)]。それは聖霊による働きとされている。これが，信仰覚醒，すなわちリヴァイバルの始まりであった。

横浜で生じたリヴァイバルは，すぐさま東京の諸教会や東京英和学校（後の青山学院）におよんだ。その熱気は，同じ年の4月，大阪で開催された第2回宣教師会議（大阪宣教師会議）と，その翌月，

1） 中村敏．日本キリスト教宣教史：ザビエル以前から今日まで．いのちのことば社，2009．p.168。

2） 日本キリスト教歴史大辞典．教文館，1988．p.682.「初週祈祷会」の項.

3） Cary, Otis. *A history of Christianity in Japan: protestant missions*. F. H. Revell, 1909. Capt. 6. *Rapid Growth. 1883–1888*. 邦訳：日本プロテスタント宣教史：最初の50年（1859–1909年）．江尻弘訳，教文館，2010．第6章「急速な成長を遂げた時代（1883–1888年）」

4） 植村正久と其の時代．第2巻．教文館，1938．p.546–579.

5） 前掲辞典．p.1493.「リヴァイバル」の項.

東京で開かれた全国基督教徒大親睦会へと引き継がれた[6]。親睦会に参加した宣教師たちは各地の教会にもどり，やがてリヴァイバルは全国の祈祷会へと拡がっていった[7]。

その高ぶりは，1884年3月16日には京都におよび，同志社全体が霊的興奮に包まれた。祈祷が続き，「その日から1週間，若者たちは神との関係以外のことを何も考えられなくなった」[8]。当時の日本には，神から聖霊が降りてくるという体験を表す言葉がなかったために，京都の神学生は「リヴァイバル」をそのまま外来語として使った[9]。

リヴァイバルは，日本人の宗教観に大きな影響をあたえ，また日本の教会が飛躍的に成長する契機となった。この現象によって日本のキリスト者人口は1885年に教会数が168，信徒数が11,000人であったが，1890年には教会数は約300，信徒数は34,000人にまで増加した[10]。

2. リヴァイバル影響下での1884年初週祈祷会

1884年1月，J.H.バラの告白から1年後，日本に起きたリヴァイバルの影響を受けて1884年の初週祈祷会は開催された。この初週祈祷会の全容はまだ確認できておらず，関係年表[11] [12]にも記載がない。現在のところ，当時の週刊英字紙*Japan Weekly Mail*[13]（以下，*JWM*）の同祈祷会関連の記事がその概要を知る唯一の手がかりとなっている。

プログラム（**図1**）から分かる通り，1884年の初週祈祷会は，1月6日(日)から1月13日(日)まで，築地と横浜の両ユニオンチャーチで開催された[14]。築地会場では，1月10日(木)に，第10回福音同盟会年次総会（the Tenth Annual Meeting of the Evangelical Alliance of Japan）が開催され，クライン夫妻が会員として承認されている[15]。

6） *Proceedings of the General Conference of the Protestant Missionaries of Japan: held at Osaka, Japan, April, 1883*. Yokohama: R. Meiklejohn, 1883.
https://archive.org/details/proceedingsofgen00geneuoft（最終閲覧日2018-10-21）

7） 二瓶浄幸．大島サキと活水における最初のリバイバル．活水論文集．健康生活学部編．58, 2015．p.1-19.

8） Cary, 前掲書，1909．p.171．邦訳p.239.

9） *The Missionary Herald*, 80(6), 1884．p.207.
https://archive.org/details/missionaryherald806amer（最終閲覧日2018-10-21）

10）中村，前掲書，2009．p.166-169.

11）日本キリスト教史年表．改訂版．教文館．2006.

12）日本美普教会年譜．松永徳太郎編．信愛社団．1967.

13）*The Japan Weekly Mail: a review of Japanese commerce, politics, literature and art*．ジャパンメール新聞社により1870年創刊，1915年まで刊行。
https://books.google.co.jp/books?id=TmcxAQAAMAAJ（最終閲覧日2018-10-21）.
上記を含め，F.C.クラインに係わる資料調査は名古屋学院大学大学院事務室・山内隆文氏に拠っている。

14）初週祈祷会（the week of prayer）の翌週にthe second week of prayerも開催されているが，本稿では初週を取り上げる.

15）*JWM*, Jan．19, 1884．p.19.

THE WEEK OF PRAYER.

The programme for the Twenty-fifth Anniversary of the Week of Prayer to be held from the 6th to the 13th inst., has been published and circulated as usual by the Japan Branch of the Evangelical Alliance. The Arrangements for Meetings to be held in Tokiyo and Yokohama are as follows:—

TOKIO,

UNION CHURCH, TSUKIJI.

Sunday—11 a.m., Sermon by the.....Rev. D. S. Spencer
Monday—4 p.m., Prayer-meeting led by the Rev. C. D. Fisher
Tuesday—4 p.m., Prayer-meeting led by the Rev. J. P. Moore
Wednesday—4 p.m., Prayer-meeting led by the Rev. C. S. Eby
Thursday—2.30 p.m. The Tenth Annual Meeting of the Evangelical Alliance of Japan. Addresses by the President Rev. Hugh Waddell, "Review of Christian Work during the year 1883;" Dr. C. G. Knott, "Dreams of the Past, and Facts of the Present;" Rev. A. A. Bennett, "Allegiance the Strength of Alliance."
Friday—4 p.m., Prayer-meeting led by the Rev. Mr. Cole
Saturday—4 p.m., Prayer-meeting led by the Rev. D. S. Spencer
Sunday—11 a.m., Sermon by.....Rev. D. Thompson

YOKOHAMA.

Sunday—Union Church, 11 a.m., Sermon by the Rev. J. T. Smith
No. 212, Bluff, 8 p.m., Prayer-meeting led by J. A. Thompson, Esq.
Monday—Seamen's Mission, No. 86, 5 p.m., Prayer-meeting led by.....Rev. H. Loomis
Tuesday—Seamen's Mission, No. 86, 5 p.m., Prayer-meeting led by .....Rev. E. S. Booth
Wednesday—Seamen's Mission, No. 86, 5 p.m., Prayer-meeting led by.....A. J. Wilkin, Esq.
Thursday—Seamen's Mission, No. 86, 5 p.m., Prayer-meeting led by.....Dr. T. W. Gulick
Friday—Seamen's Mission, No. 86, 5 p.m., Prayer-meeting led by .....Rev. W. C. Davisson
Saturday—Seamen's Mission, No. 86, 5 p.m., Prayer-meeting led by .....Rev. T. P. Poate
Sunday—Union Church, 11 a.m., Sermon by the Rev. F. C. Klein
No. 212, Bluff, 8 p.m., Prayer-meeting led by Rev. C. E. Garst

図1　1884年初週祈祷会のプログラム（*JWM*, Jan. 5, 1884）

1884年1月13日，横浜のユニオンチャーチで聴衆の前に立ったとき，F.C.クラインは26歳の若者であった。妻メアリーと共に初めて来日し，横浜のブリテン女学校で教え始めて4ヵ月目，日本の鮮烈な印象を覚えていたであろう時期である。この3年後，クライン夫妻は横浜から名古屋に移り，名古屋英和学校を設立する。この初週祈祷会での説教は，130年を経て見つかったF.C.クラインの「肉声」であり，彼の使命を知る手がかりとなりうるものである。

F.C.クラインの説教は，*JWM* 1884年1月19日号に全文が採録された[16)]。掲載された説教は，315行，2797語にわたった。

16）*JWM*, Jan. 19, 1884. p.64–65. 本説教の概要は，黒柳志仁「F.C.クラインの説教と敬神愛人」麦粒.（127），2016. p.4–8で報告している。

3. F.Cクライン説教の原文とその全訳

以下の訳文[17]は*JWM* 1884年1月19日号の一部記事を含め，同紙に掲載されたF.C.クラインの説教の原文と訳文を並列して記載した。なお，訳文の括弧内は，翻訳上補足した箇所である。また原文には，適時改行をくわえた。訳文中の聖書箇所は，すべて日本聖書協会新共同訳聖書から引用している。

原　　文	訳　　文
WEEK OF PRAYER	初週祈祷会
SIXTH AND Seventh DAYS.	第6日目，第7日目。
The meetings of the closing days of this week have exceeded all that preceded them in interestness and number of the attendants. The addresses of gentleman in the community, not connected with Missions, in testimony to what changes they had witnessed were emphatic and encouraging, while the many subjects for request connected with Missions were urgently presented at the throne of Grace. In view of the action of the Evangelical Alliance, recommending the observance of a Second Week of Prayer, it was resolved to continue the meetings at the Seamen's Mission Rooms, No. 86, another week and meet from 5–6 p.m. Also in view of the very special services to be held by the native Churches of Yokohama, to-day, at 9 a.m., and 7 p.m. at the Union Church, it was resolved that to-day's subject be Prayer for the Revival of God's work among the Japanese. Dr. J.C. Hepburn was expected to lead the meeting. The subject for the days following to be Prayer for the revival of God's work among the Foreign Residents of Yokohama.	今週末の日々の祈祷会は，出席者の関心と参加者数が，これまでよりすべて上回っていた。宣教団体とは関係のない紳士の発言は，地域社会において目撃された多くの変化を語られ，力強く励ましとなった。一方，宣教団体に関連してリクエストされた多くの祈祷課題は恵みの座（教会堂の前壇）で緊急に祈られた。福音同盟の活動に関しては，祈祷の第二週の遵守を勧めたが，他の週は船員伝道室86号室で祈祷会を継続すること，そして午後5から6時に開催することが決定された。本日の午前9時と午後7時にユニオンチャーチで横浜の日本人諸教会によって開かれるまさに特別な礼拝に関して，本日の祈祷課題は日本人の間の神の働きのリヴァイバルのための祈りであることが決定された。J.C.ヘボン博士がその祈祷会を導くように求められた。続く日々の祈祷課題は，横浜の外国人居住者における神の働きのリヴァイバルのための祈りであることが決定された。
The Foreign service at the Union Church yesterday morning was largely attended,	昨日の朝のユニオンチャーチでの外国人礼拝は多くの人々が出席した。牧師クライン氏に

17）訳出にあたっては，名古屋学院大学外国語学部Phillip R. Morrow教授のご助言を得た。記して謝意を表する。

and the Sermon by Rev. Mr. Klein was of so impressive a character that, as far as possible, we will reproduce it in these columns to-morrow.

The Meeting at 212, Bluff, generally of a very interesting character, was more than usually so in view of a number of interesting facts being stated showing the marvelous movings of God's Spirit at present in Japan among all classes, high and low. The question was raised whether we had a right to believe God would convert all Yokohama? Not a few answered in the affirmative that God could, and it was the duty of all to pray that he would do so, and that in order thereto, we needed most of all to reiterate the Disciples' Prayer, "Lord, increase Our faith!" Attention was called by a sea-faring man to the need of prayer for the observance of the Sabbath on the part of our tea-merchants, owing to the extensive effect of their example upon all classes of the people. He himself could bear witness to the ruin Sabbath desecration had brought to men of business profaning the Sabbath.

よる説教は，非常に感動的な特徴があったので，可能な限り，明日の寄稿欄にそれを再現したい。

山手212番での祈祷会は，概して非常に興味ある特徴があった。現在の日本における身分のあらゆる階層の間での神の霊の驚くべき御業について，多くの興味深い事実が通常より多くあった。神が横浜の全ての人々を回心される事を信じて良いのかという問題が起こった。少なからずの者が神はおできになる，そしてそうされるように祈ることがすべての者の義務であり，そのために私たちは「主よ，私たちの信仰を増したまえ」という使徒たちの祈りを繰り返すことが特に必要であることを力強く答えた。あらゆる階層の人々への幅広い模範となるので，お茶商人たちの安息日の遵守ための祈りが必要であることが一人の船乗り業者によって要求された。彼自身は，安息日の冒涜は安息日を無視して仕事する者たちが身を滅ぼしていくことへの証言をしたのだろう。

Closing Discourse

The Sermon on the text suggested by the Evangelical Alliance for the last Sabbath of the weekly of Prayer was preached at the Union Church, Yokohama, 13th inst., by the Rev. F. C. Klein, of the Methodist Protestant Mission to Japan, and was as follows: –

1ST THESSALONIANS, 3, 12–13.

"And the Lord make you to increase and abound in love one toward another, and toward all men, even as we do toward you: To the end he may

閉会の説教

初週祈祷会の最後の安息日のために福音同盟によって勧められた聖書箇所に関する説教は，今月13日の横浜のユニオンチャーチでアメリカ・メソジスト・プロテスタント教会日本宣教団のF.C.クライン牧師によって述べられた。それは次のようであった。――

テサロニケの信徒への手紙―3：12–13

「どうか，主があなたがたを，お互いの愛とすべての人への愛とで，豊かに満ちあふれさせてくださいますように，わたしたちがあな

stablish your hearts unblameable in holiness before God, even our Father, at the coming of our Lord Jesus Christ with all his saints."

たがたを愛しているように。そして，わたしたちの主イエスが，御自身に属するすべての聖なる者たちと共に来られるとき，あなたがたの心を強め，わたしたちの父である神の御前で，聖なる，非のうちどころのない者としてくださるように。」

The Apostle's affection for those who were led to Christ by his efforts was marked, and his wise counsel and godly admonitions to them are profitable unto all. Unquestionably there were reasons why the Thessalonians should increase and abound in love, and that similar reasons exist to-day is, doubtless, why the text has been presented for elucidation. When we stand with earth's unfortunates amid scenes of degradation, where the spray from the rushing current of iniquity falls at our feet, and our hearts sicken at the sight of lawless transgressions, our thoughts turn to the seared innocence of Paradise as the starting point, and the absence of love as the cause which reddened the earth with a brother's blood, and has sent wild, ceaseless pulsations of enmity coursing through the forms of men.

パウロの宣教の業によってキリスト者となった人々への使徒パウロの愛情が，この聖書箇所に表明されています。そしてパウロの賢明な助言と敬虔な訓戒はすべての者に有益であります。疑いもなく，テサロニケの信徒たちが愛において増し加えるべきである理由がありました。そして疑いなく，この聖書箇所が同様の理由で今日存在しています。私たちが殺伐とした破壊の現場に地上の不運な人々と共に立つ時，その足元は悪の濁流が勢い良く流れ吹き出しています[18]。私たちの心は，無法の犯罪が横行している現場を垣間見て，嘔吐をもよおすようになります。そこで，我々は再出発し，ただ天国に想いを傾けるのです。愛なきは，兄弟の血を地に垂れ流し，愛なきは，憎悪に満ちた獣のように，終わりなき憎しみの鼓動となって人の肉を突き破るのです。

'Tis the reign of malignant hatred to God and man which tarnishes the name of man, and sullies still more his lowered manhood. Human conception can form no realization of a grander work than this, the restoration of fallen humanity, and the reéstablishment of its love, elevating and unfolding, as it does, human nature into the image of God; and this sublime work well merited the direct interposition of

神と人に対する悪意に満ちた敵意が支配的となれば，人間の名声が傷つき，更に堕落した人間性を汚します。堕落した人間性を回復させ，人の愛を再創造すること程，人が考えられる中で雄大な業はないのです。今日も，愛とは徳を高め，愛とは開放的であり，愛とは人格を神の似姿へと変えるものです。この崇高な業は（十字架の）代償という偉大な業において，神の直接的な介入で十全に完了しま

18）F.C.クライン牧師は，南北戦争（1861年～1865年）を経験している。その時代背景がこの記事に読み取ることもできる。

God in the great act of substitution, whereby the plan of redemption was fully and forever consummated.

した。それによって，贖いの計画が完全にかつ永遠に完成したのです。

Why should we abound in love? Because it is God's command, and an essential requisite of Christian character. Because we are the subjects of prejudice; we draw our conclusions with improper motives, influenced, too often, by local, personal, and other considerations; we are prone to unduly depreciate the merits of others, and unduly magnify our own, and other manifestations make it a necessity for us to increase and abound in love,

なぜ私たちは愛に満ちる必要があるでしょうか？　それは神の戒めにして，キリスト者の徳の本質です。私たちは偏見の輩です。不徳の動機により結論を急ぎ，狭く個人的且つその他の考えによりあまりにもしばしば影響を受けるものです。他者の徳を過度に見下し，自分の徳を過度に吹聴するのです。この様な不徳の実態であるからこそ，愛を増し加え，愛を豊かにする必要あるのです。

for as Spurgeon aptly says : −"Love is the marrow of the bones of fidelity, the blood in the veins of piety, the sinew of spiritual strength, yea, the life of sincere devotion." The source of Love is in God, "for love is of God," and the apostle says "the love of God is shed abroad in our hearts by the Holy Ghost." A sincere, and an earnest trust in God insures it as an inevitable result, and "The consciousness of its presence in the heart is what makes the Christian," for his newly awakened powers are actively exercised by love as the motive power; and with it he possesses the sure and only foundation of all hopes which are inspired by the acceptance of the Gospel of Jesus Christ.

例えばスポルジョンが適切に述べています。「愛は忠実の骨の髄，敬虔という血管の中の血液である。また愛は霊的活力の原動力である。そう，愛は誠実な信仰の命なのである」。愛の源は神の内にあります。使徒パウロは「神の愛が聖霊によって私たちの心に注がれている」と語っています。誠実に熱心に神に信頼することにより，愛は当然の結果として保証されるのです。心の中にある愛の臨在によって歩むことにより，キリスト者はキリスト者として存在していくのです。なぜならば，キリスト者の新しく覚醒された力があらゆる人生の原動力となり，愛によって活動的に実践されるからです。愛によってキリスト者は全ての希望の中で，確実で唯一の基礎を獲得するのです。これは，イエスキリストの福音を受け入れることによって霊的に目覚めることなのです。

To properly love we must know something of the object of our affection, consequently knowledge must come in to satisfy and also develop the love possessed. A true man can only love the truth, and as God is truth, the

正しく愛するためには，私たちはその愛情の対象についての何かを知らなければなりません。したがって，知識は得られた愛を満足させ，また成長させるために入って来なければならなりません。真実な人はただ真理のみを

more we know of him the more we can love him. There can be no doubt that love is a creation, for both doctrine and experience teach that he whom God loves, in him he creates love on the principles of cause and effect; for when the man fully realizes that God does love him he loves God in return; and the slightest drawing to him, I may remark, is the result of His Spirit, and should be encouraged by us. Why love one another as Christians? Because "We know that we have passed from death unto life, because we love the brethren." "He that loveth not his brother abideth in death."

愛することができます。そして，神は真理であるので，私たちが神について知れば知るほど，神を愛することができます。愛が創造であることは疑うことができません。なぜなら，教義と経験が教えることは，神は愛する人において原因と結果の原則によってその人の中に愛を創造します。なぜなら人は神がその人を真実に愛していることを十分に悟る時に，人は返礼として神を愛します。そして，私が付け加えたいのは，その最も僅かに神へ引き寄せられる事は，神の聖霊の結果であり，私たちによって奨励されるべきであります。なぜ，キリスト教徒としてお互いに愛すべきなのでしょうか。なぜなら，「わたしたちは，自分が死から命へと移ったことを知っています。兄弟を愛しているからです」[19]。「愛することのない者は，死にとどまったままです」[20]。

Our hopes centre in a common object, we each seek the same dwelling of the Almighty where alone can come no footstep of decay, and we ought to be closely united in the endeared ties of true brotherly love, for as we feel it will be thus in Heaven, only intensified, why not have it begun here below?

私たちの希望は，ひとつの共通の目標に集中します。その目標とは衰退の足跡がない全能者と変わらない臨在を求めます。私たちは真実の兄弟愛の慕わしい関係において親密に結ばれるべきであります。なぜなら，私たちが感じるように，それは天において家族のようであり，さらにそれが強められるでしょう。ですから，地上において真実の兄弟愛を始めようではありませんか。

"If God so loved us we ought also to love one another." 'Tis human to love those who love us, but the Gospel love is as broad as Christendom, and sweeps out over the whole earth; and if we selfishly limit ours we fall short of the Christian

「愛する者たち，神がこのように私たちを愛されたのですから，わたしたちも互いに愛し合うべきです」[21]。私たちを愛する人々を愛するのが人間です。しかし，福音の愛はキリスト教世界のように広く，そして全地球をお

19）ヨハネの手紙一3: 14a

20）ヨハネの手紙一3: 14c

21）ヨハネの手紙一4: 11

standard. The Psalmist never threw upon the canvass of humanity's ever-unfolding picture a more sublime scene than is depicted in "Behold how good and how pleasant it is for brethren to dwell together in unity."

おいます，そしてもし私たちがこの愛を利己的に制限するならば，私たちはキリスト者の基準に届かないのです。詩編作者は，人間性のあふれる絵のキャンバスの上に，「見よ，兄弟が共に座っている。なんという恵み，なんという喜び」[22] としてより気高い場面を描いています。

With such love as is urged upon us by the Gospel the Christian rises far above the ravings of prejudice, the ambitions of limited self, and the Clanishness of church or party, but, loving God most of all, he loves Christians because they are God's children.

福音によって私たちに促されているそのような愛によって，キリスト者は偏見に満ちた戯言，限られた自己の野望，教会また教派の派閥をはるかに遠く越えます。そしてキリスト者は最も神を愛すると同時にキリスト者を愛します。なぜなら彼らは神の子どもたちであるからです。

Therefore, this love is a necessity in the life that seeks a steady development here in righteousness, and a full fruition of all hopes in the beyond where life will be lived in its purity, peace, and love. Why should we love all men? God is no respecter of persons, since he loves all men, how can we do otherwise than love them?

それゆえにこの兄弟愛は，地上において義の完成を追い求め，純潔，平和と愛に満ちた天国における全ての希望の完璧な実りの生活を希望するのに必要であります。なぜ私たちはすべての人を愛すべきなのでしょうか。神は人々を何ら贔屓する者ではありません。神はすべての人を愛しているからです。私たちは人々を愛するより，他の方法で行動することができますか。

We must never forget that the soul of the lowest wretch is as precious to him as our souls are to us, and that the same Saviour died to regain him and develop all his faculties.
All men, especially sinners, need the warm sympathy of true hearts, and if we turn to them a cold heart we not only disobey God, but stultify our Christian manhood, for if he is ever ready to shed abroad his love in their hearts, how dare we fail to love them.

私たちが決して忘れてならないことは，最も惨めな人の魂は私たちの魂と同様に，神にとって高価であるということです。そして，同じ救い主が最も惨めな人を再び得，そしてすべての彼の才能を成長させるために死んだということです。あらゆる人は，特に罪人は真実の温かい心の同情を必要としています。そしてもし私たちが冷たい心を彼らに向けるならば，私たちは神に不従順であるのみならずキリスト者であることを無にします。なぜならもし神が彼らの心に神の愛を広く注ぐ用

22）詩編133: 1b

Paul was only a Christian man, laying aside his special gifts and powers, yet feeling his weakness, but here he holds up his manner of love to the Thessalonians, as an example of what their love should be to one another and to all men. To-day we possess the same hopes, privileges, principles, and character-moulding forces of Christianity as he possessed, yet can we begin to say to others what he said to the Thessalonians? Have not God and men the right to expect it of us with the profession we make?

None rejoice more than I that we are in these times of true philanthrophy and great advance, where the revived principles of a broad humanics are felt in the widening of thought and feeling, and where the reign of keen asperities, impassioned thought, and embittered prejudice recedes further into the past. But let us be honest, and acknowledge that it is the basis of our Christianity which has caused it, the lever which moves raises and develops the world; that which has done so much to harmonize men's differences, to soften the asperities of their estrangements, to focalize their sympathies and to centralize their efforts, and that upon which all worthy enterprises can rest; 'tis the love of God to man, and man's love to God and his fellow-men. Therefore we, with the moving millions of Christians, who, feeling the common ties, having the common interests of a uniting brotherhood, are panting, amid life's struggles, for the one eternal peaceful bivouac

意があるのならば，私たちキリスト者が彼らを愛さない訳にはいきません。
パウロはただのキリスト者であり，彼の才能と力を脇へおきつつも，なお自分の弱さを感じていました。しかしここで，テサロニケの信徒の愛がお互いとすべての人々に対しての模範として，パウロの愛し方を掲げています。今日私たちは，パウロが抱いていたのと同様のキリスト教会の希望，権利，原則，人格形成力を持っています。しかし，私たちは，彼がテサロニケの信徒へ語ったのと同様のことを他者に宣べ始めることができるでしょうか。神と人々は，私たちがなす告白と共に私たちから愛を期待する権利を持っていないのでしょうか。
真実の博愛と偉大なる進歩のこの時代において，広い人間学のリヴァイバルの原理が思考と感情の広範において感じられ，そこで鋭い過酷さや熱烈な思考や苦い偏見の支配が過去へと遠く退くこの時代において私たちがキリスト者として存在するということを私よりも喜ぶ者はいません。しかし，正直になって，次のことを認めましょう。すなわち，愛を起こしたのは私たちのキリスト教の土台であり，動かすその梃子が世界を起こし，発展させます。すなわち，人々の違いを調和させるのに多くのことを成して，彼らの離反の過酷さを和らげ，彼らの同調に焦点を合わせ，彼らの努力を集中化し，その上ですべての価値ある事業が安定するのであります。その梃子が，人に対する神の愛であり，仲間への人々への愛です。それゆえに私たちは，聖霊によって動かされた多くのキリスト者と共に，共通の絆を感じ，結束した兄弟の共通の関心を持ちながら，人生の闘争のただ中で，遥か彼方にあるキリスト者の結集した平原で，永遠に

on the marshalled plains beyond, ought, and I trust do, possess the love which rises above the affected friendships of earth, and sees in every man a brother, and has for such a brother's heart and open hand, seeing in him, as in all men, latent powers and possibilities which, if roused and improved, will develop grand results for God and humanity.

I honor and love all who thus feel the promptings of a pure unselfish brotherly love; and I would rather far be an humble votary at the shrine of those who, in thought and labor, in life and in death, sought the elevation of the degraded, the broadening of fraternal relations, and the inculcating of principles which bind heart to heart the sons of men, than to stand over the mouldering dust of the greatest warriors who have ever stained the earth with the blood of their fellow men. We are here, as Christians, in these fair isles, not to seek the further degradation of the inhabitants; not, with rude iconoclastic act, to demolish their temples; not to offer them a substitution of rites and ceremonies, neither force on them the emptiness of pretentious vicegerency claims, nor bind their thought; not to turn their allegiance from the Mikado and the powers that be; but with the open Bible — thank God for it in Japan to-day — with its grand principles, glorious doctrines, and inspiring promises, to wage a peaceful warfare in those spheres of thought and feeling where the reason, judgment, and conscience of men are touched and acted upon for their eternal interests.

平和な野営をしながら喘いでいます。私は地上にある見せかけの友情を上回る愛を持っています。その愛はあらゆる人々を兄弟とみなし，そのような兄弟の心を持って諸手を上げるのであります。その愛は，あらゆる人々におけるように隠れた力と能力を見出し，揺り動かされて成長するならば，神と人類にとって最高の結果に発展していくのです。

私は，純粋に利己的でない兄弟愛を即座に示す人々を敬い，愛します。私は，人々の血でもって地上をかつて汚してきた最も偉大な戦士たちの朽ち果てる塵の上に立つよりも，思考と労働，生と死において，悲惨な目にあった人々と友愛関係の幅を広げること，人の心と心を結びつける原則を探求する人々の所縁の地にある謙虚な伝道者となりたいものです。私たちは，これらの素晴らしい島々にキリスト者として滞在しています。その住民の品位を落とす事を求めてはいませんし，彼らの寺院を破壊する粗暴な偶像破壊主義や礼拝や儀式の代わりとなるものを彼らに示すのではありません。気取った役人的な要求の空虚さを彼らに強いるのでもなく，彼らの思想を縛るのでもなく，現存されるミカドと権力から彼らの忠誠心を背けさせることでもありません。日本語に翻訳された聖書[23] ―今日日本においてその事を神に感謝しますが―その素晴らしい原理と輝かしい教義と聖霊に満たされた神の約束こそが平和への思いを喚起させるのです。そこで人々の理性，判断，良識は彼らの永遠なる関心事へ影響されて行動へと駆り立てられるのです。

23）1887年に明治元訳聖書が完成した。1872年に開始された日本語訳翻訳事業にはヘボンも加わっている。

We seek the elevation of the Japanese that they may become what they ought to be, and what they will be by the acceptance of the Gospel of Jesus Christ, which we believe they will do. And surely while here, far from the associations of our native lands, we need to be closely united in love as God's children, and possess true love for all who tread the soil of the Mikado's Empire. What has our love to do toward having us presented unblameable in holiness?
Love is the foundation and ramifier through the superstructure of Christian character; and from it come the natural and expected developments which mark the ornamentation of a pious life, and, if properly used, it can not fail to promote our growth in grace, and in the knowledge of our Lord Jesus Christ. The text assures us that, at the coming of Christ our hearts are to be presented blameless in holiness.

Why? Because Christ is holy, and we are to be like him, and because "without holiness no man shall see the Lord." Our condition, and the time when, in that condition, we are to be presented are set forth. To my mind that is clear enough. A man's body is imperfect. Jesus Christ was the only perfect man since the fall. when a man's body is consigned to the grave it is still an imperfect body, but his soul, if he died in the faith of Jesus Christ, will be cleansed by the blood of Jesus, for "the blood of Jesus Christ his Son cleanseth us from all sin," and it will be fit for Heaven, and angelic associations.

私たちの確信は，日本人がイエス・キリストの福音を受け入れることによって本来あるべき姿になる事です。確かにここ日本いる間，私たちの郷里からは遠く離れている訳ですが，私たちは神の子として愛において密接に結び付き，ミカドの帝国の土地を踏んでいる全ての人々への真実の愛を持つことが必要です。聖化において責めのない者として示されるのに私たちは愛を持って何をすべきでしょうか。
愛はキリスト者の人格を日々聖霊により劇的に変化させる基礎であり拡散させるものであります。愛によって当然期待された成長が，私たちの敬虔な人生の飾りを跡に残すのです。もし正しく愛が実践されるのならば，愛は恵みとそして私たちの主イエス・キリストの知識における成長を推進させます。テサロニケの手紙は，キリストの来臨の時に私たちの心が聖化において責めのない者として示されることを確証しています。
なぜでしょうか。キリストは神聖であるので，私たちも彼のようにあるべきです。なぜなら，聖化なくして誰も主を見ることはないのです。私たちの状態といつキリストの前に出るのかという条件は既に決められています。私の心にその条件は十分に明らかであります。人の体は不完全です。イエス・キリストは原罪以来ただ一人完全な人でありました。人の体は墓へ入っていく時，その体はなお不完全です。しかし，彼の魂は，もし彼がイエス・キリストを信じて亡くなれば，イエスの血によって清められるでしょう。なぜなら，「御子イエス・キリストの血はすべての罪から私たちを清めてくださり」，そしてキリストの血は天国と天使との交わりにふさわしいからです。

At the resurrection, that body will be raised a prefect, glorious body like unto Christ's. The soul already perfect will reinhabit that glorious body, and thus will be presented unblameable in holiness at Christ's coming. Bear in mind that God is thus to present us there, at the coming of our Lord Jesus Christ. But he can not there thus present us, unless we now commence the work of elevation and growth in grace. Heathen philosophers asked the question, is the soul immortal? Some accepted a kind of affirmative answer, but it was for this divine revelation, with its matchless power to lift the veil of the future, and declare in unmistakable tones that "this corruptible must put on incorruption, and this mortal must put on immortality;" and the words of the Son of God, are "I am the resurrection and the life, he that believeth in me though he were dead, yet shall he live."

Thus forever are scattered the shadows which hung round the grave, for now we see immortal life rising before us resplendent in unclouded glory, a fixed, immutable verity. We therefore see why the Apostle said "if in this life only we have no hope in Christ we are of all men most miserable," for the future is before us, into it we each must enter, and if alone as we are, where can we go, what can be our hope there without Christ?

復活の時に，体はキリストのように完全な，栄光の体に変えられるでしょう。すでに完全にされた魂は，栄光の体に再び住むでしょう。こうして，キリストの来臨時に聖さにおいて責めのない者となるでしょう。神はこうして，主なるイエス・キリストの来臨の時に，私たちを御前に参列させてくださる事を覚えてください。しかし，もし私たちが恵みにおける向上と成長の働きを，今始めないならば，神は私たちを御前に集わせてくださいません。異教の哲学者たちが，魂は不死であるのか，と問いました。ある者はそうであるかもしれないと答えました。しかし比類のない力を持って未来の覆いを引き上げ，「この朽ちるべきものが朽ちないものを着，この死ぬべきものが死なないものを必ず着ることになる」[24] と明確に宣言された神の啓示が明らかにされるためでした。神の御子の言葉には「わたしは復活であり，命である。わたしを信じる者は，死んでも生きる」[25] と記されています。こうして墓の周りに掛かっていた影は永遠に消えます。というのは，今私たちは不死の命が雲ひとつない栄光と確かな不変の真実を持って艶やかに目前に上がるのを見るからです。私たちはそれ故に，なぜ使徒パウロが「この世の生活でキリストに望みをかけているだけだとすれば，わたしたちはすべての人の中で最も惨めな者です」[26] と語ったのかを納得します。というのは，未来は私たちの眼前にあり，その中へと私たち一人一人は入場しなければなりません。キリスト無くして，何処へ行きましょう。キリスト無くして，何が私

24）コリントの信徒への手紙一15: 53

25）ヨハネによる福音書11: 25b

26）コリントの信徒への手紙一15: 19

It is just as easy for me to believe that Jesus Christ, the Son of God, came into this world in human form, that his advent was heralded by angelic choirs, and that he received the homage of the wise men of the East in the manger of Bethlehem, as it is for me to believe that George Washington lived and died, on the banks of the Potomac, in the frame house on the slopes of Mount Vernon. And as I rest the interests of my immortal soul on my belief that Jesus trod the streets of Jerusalem, spent that awful season in Gethsamene, was crucified on Calvary, even though "he did no sin, neither was guile found in his mouth," that he rose from the sepulchre's gloom and walked and talked with men after his resurrection, so do I as firmly believe he is coming again, because scripture declares it.

He himself said, "I go to prepare a place for you. And if I go and prepare a place for you, I will come again, and receive you unto myself, that where I am ye may be also." No, theory, argument, or anything else is now needed. I can add nothing to this positive declaration from the Son of God. And as not a single statement he made ever fell short, or has ever been proven to be untrue, I am fully persuaded that my belief is settled in One who is both mighty to save, and mighty to come again. The hard, stubborn, immovable fact stands out before the world that he has fulfilled all he promised, in the time designated, and with the gilding of the

たちの希望であり得るのでしょうか。

神の御子イエス・キリストが人間の姿でこの世に来られたということ，彼の降臨は天使の聖歌隊によって告げ知らされたということ，そして彼はベツレヘムの飼い葉桶において東方の博士たちの表敬訪問を受けられたということを私が信じることは容易です。同様に，ジョージ・ワシントンがポトマック川の川岸の側のバーノン山の山間の木造家屋で生活して亡くなったということを私が信じることも容易です。そして私が，イエスはエルサレムの通りを歩き，ゲッセマネにおいて苦悩に満ちた時を送り，カルバリに十字架に架けられ，彼は「罪を犯したことがなく，その口には偽り」[27] がなく，彼が墓の暗がりから蘇り，復活後に人々と共に歩き，話されたという事を信じるように，私は彼が再臨されることを固く信じるのであります。なぜなら，聖書がそれを宣言しているからです。

彼自身は言われた，「行ってあなたがたのために場所を用意したら，戻って来て，あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして，わたしのいる所に，あなたがたもいることになる」[28]。どんな理論，議論，その他諸々の事は今必要とされません。私は神の御子からのこの確信ある宣言に何も加えることはできません。そして彼が語った事で実現しなかった事はなく，また不真実であることを証明されたこともありません。私は救う力があり，救うためにもう一度来られる唯一のお方を信じる信仰に固く立っています。堅固で頑固，不動の事実は世界で明らかになっています。何故なら，キリストは約束したすべてを，沈む

27）ペトロの手紙一2: 22b

28）ヨハネによる福音書14: 3

western hills by the daily setting sun, hastens to us, with silent tread, the dawn of eternity's glad morn.

太陽で黄金に輝く西の丘と静寂の中に栄光に輝く朝のごとく，時にかなって成就されました。

The outlook to-day is flooded with the glory of coming universal triumphs for Christ. Already the campfires of the Lord's army are burning on the mountain-tops and in the valleys, lighting up the heathen lands and the isles of the sea. He is coming, surely coming; and then shall be heard the trump's loud alarm, and the glad triumphant song of Christendom, growing louder and louder still as nation after nation catches the grand refrain, till, mingling with the music of the spheres, the universe will magnify the eternal Majesty of the earth and skies.

今日の展望は，キリストの来る普遍的勝利の栄光に溢れています。すでに主の軍隊のかがり火が山の頂と谷に燃え，異教の地と海の島々を照らしています。キリストは来られます。確かに再臨されます。そしてその時にトランペットの大きな響きとキリスト教徒の喜びの勝利の歌が聞かれるでしょう。その勝利の歌は，あらゆる民族が偉大な繰り返しをするにつれて，いよいよ大声になり，天上の音楽と混ざって，全宇宙が天と地の永遠の威厳を賛美するでしょう。

When, in conclusion, is this to occur? I do not know, no man knows, for "the day of the Lord will come as a thief in the night." A lack of knowledge of when it is to be does not, in any sense, lessen the certainty of its coming. How is it to occur? By the power of the Almighty; "according to the working whereby he is able to subdue all things unto himself."

結局これらの事は，いつ起こるでしょうか。私には知り得ません。誰も知らないのです。というのは，主の日は夜の強盗のように来るのです。主の日がいつ来るのかを知らないとしても，その日の確実性を減少させるものではありません。主の日は，どのように起こるのでしょうか。全能者の御力によって，すなわち「キリストは，万物を支配下に置くことさえできる力によって」[29] です。

And the same power which swept victoriously through death's dominions, and triumphantly waved the broken bonds of the grave, will likewise cause "The heavens to pass away with a great noise and the elements to melt with fervent heat, the earth also and the works that are therein to be burned up."

死の支配と砕かれた墓の鎖を勝利して解放する全能者の同様の御力とは，「主の日は盗人のようにやって来ます。その日，天は激しい音をたてながら消えうせ，自然界の諸要素は熱に熔け尽くし，地とそこで造り出されたものは暴かれてしまいます」[30]。

"Why will this occur? That Christ's divine sovereignty' may be universally acknowledged.

なぜ，これが起こるのでしょうか。キリストの聖なる支配が普く認められるためでありま

29）フィリピの信徒への手紙3: 21

30）ペトロの手紙二3: 10

“As I live, saith the Lord, every knee shall bow to me, and every tongue shall confess to God,” that the wrongs of earth may be righted, and there are many waiting for that day, and that Jesus may gather his own from among the children of men.”

す。「主は言われる。『わたしは生きている。すべてのひざはわたしの前にかがみ，すべての舌が神をほめたたえる』」[31] ように次のように告白するでしょう。「地上の悪い行いは正しくされ，再臨の日を多く待ち望み，人の子らからイエスが自分の民を集められるように」。

But, while He tarries his coming in visible form, He is here this hour, and knocks at the door of your heart, not only somebody else’s, but your heart, for admission, that he may dwell and reign there without a rival.

キリストの再臨がないにもかかわらず，キリストはこの瞬間，ここに存在されます。そしてあなたの心のドアをノックされています。キリストは他の方だけでなく，あなたの心のドアもノックしています。ドアを開けてキリストを迎えてください。そうすればキリストはあなたと共に住み，唯一の導き手としてあなたを治めてくださいます。

‘Tis his right thus to reign, and if acceded to by each, happy will be the hour, grand will be the life, triumphant will be the death, and glorious will be the crown worn in Heaven.

こうして人を治めることはキリストの権利であります。そして一人一人が従うなら，幸いなるかな，その時は。偉大なるかな，その人生は。勝利なるかな，その死は。栄光なるかな，天で被せられる王冠は。

Well, the past is irrevocably passed. If we loved not Christians and all men as was our duty, ‘tis now too late to go yonder to do or undo. The record has been closed.

さて，過去とは変えられないものです。キリスト者と全ての人々本分として愛さないなら，過去に戻って取り返すには遅すぎます。再臨の時には記録は閉じられます。

May God grant that, taught by our mistakes and encouraged by our successes, we may press boldly onward to the coming struggle, seeking ever to increase and abound in love, looking unto Him who will guide us to the end, and at last will present us unblameable in holiness when He comes.

どうか神が次のことを受け入れてくださいますように。私たちが過ちによって教えられ，成功によって励まされて，来る苦難へと大胆に押し出されるができますように，また愛においていよいよ増し加わることを求めながら，終わりまで私たちを導き，キリストの再臨の時に聖さにおいて私たちを責めのない者としてキリストの前に出ることができるように。

31）ローマの信徒への手紙14:11b